

ウサギと共に暮らす日々のできごとから学ぶ その2

—ウサギ物語の語りから—

鍋島 恵美¹⁾・光村智香子¹⁾

A Case Study of Raising Rabbits in a Kindergarten-Setting II — Experiencing a “Rabbit’s Story” —

Emi NABESHIMA and Chikako MITSUMURA

抄 録：2007年度に誕生した1羽の子ウサギの飼育は、当時の担任に引き継がれ3歳児から4歳児へとこどもの成長と共に飼育が継続されてきた。その日々の中で、迎える親ウサギの死。ウサギの飼育にまつわるこどもとウサギの新たな物語（ストーリー）が今も生まれている。そのストーリーは、「1.ハイ（子ウサギの名前）との出会い 2.かかわりはじめる 3.一緒にいる・仲間のハイ」という展開をした。そのなかで、こどもが①家庭から幼稚園へと居場所や安心感を得ていく過程②一緒にいることから仲間になっていく過程が見て取れた。さらに、③保育者の飼育する姿勢が保護者の育児支援になること、幼児期に飼育した経験が、④小学校就学後に書き言葉を覚えたこどものいきいきした表現を引き出すことや彼らの不安定な心を癒す（ハイに会いたい）存在になっていることも分かった。いのちをつなぐ継続飼育の経験は、人の心もつないでいくことを実践から学んだ。

キーワード：ウサギ、いのち、つなぐ、飼育、ストーリー、こども、おとな

I. はじめに

現代の子どもを取り巻く生活事情を鑑みると、都心ではマンション生活のこどもが多く、土に触れたり生き物と触れたりできる機会が減少している。清潔生活指向からか、生き物を家庭の中で育てるということも少なくなってきた。それには、鳥インフルエンザの流行やカメ騷動などの社会環境問題が、生き物を飼育することに抵抗感をいだく原因となっていることは間違いない。学校教育現場で飼育することは難しい状況に強いられてきて久しい。が、幼稚園では、今も飼育・栽培の実態が多く見られるのは何故なのであろうか。それは、幼稚園教育要領総則第1「環境を通して行う」ことを幼稚園教育の基本としており、直接体験の重要性と、その経験の積み重ねから学びの基礎力（学びの芽生え）が培われるからである。

本園では、1950年代から飼育活動は保育の中に取り入れられており、その当番は5歳児の仕事として位置付いている。飼育についてのこの考え方は教職員に今も引き継がれており、衛

1) 京都教育大学附属幼稚園

生管理には最大限の努力をはかり、「掃除専用の長靴とマスクとスモックの着用、手洗いとうがいに対応する」ということから今も飼育環境を閉じることなくこどもとともに実践している。

数年間閉じられていたウサギの飼育が、2007年9月から再開することになった。誕生して自分で餌を食べるようになったばかりのウサギ2羽を他園からもらい、飼育する生活が5歳児のこどもと共に始まった。その実践から、ウサギの飼育にまつわるこどもとウサギの物語が生まれた。そのストーリーは、『1. 子ウサギとの出会い・飼育する環境を作る・そして、ウサギの名付け 2. ウサギとの遊び場を作る 3. “ウサギとの遊びの場を作る” その遊びの広がり 4. ウサギの出産と死のなかで 5. つながる命との出会い』といった展開をした。子ウサギとの出会い、自分たちの仲間となるウサギ、大きくなったウサギの出産、新たな命の誕生、親ウサギの死といった、命の生成・つながりをめぐる出来事（ストーリー）のなかで、こどもは、期待に弾む心、親しみ、愛着、驚き、慈しみ、喜び、心配、不安、悲しみといった様々な感情のうねりや情緒的な体験を豊かにしている様子が、エピソードから読み取ることができた（鍋島ら2010）。5歳児の修了と共に誕生した子ウサギは1羽（ハイと命名）を幼稚園に残し好きなこどもの家庭へともらわれて行った。親ウサギは、2008～2009年度の5歳児に、1羽の子ウサギ「ハイ」の飼育は、誕生に立ち会った保育者のもとで2008年度は3歳児、2009年度は4歳児に引き継がれている。

ここでは、子ウサギ「ハイ」の継続する飼育に焦点化し、つながる命と共に育ちあうこどもとおとなの貴重な体験を、前回の実践研究に引き継ぎ「ウサギ物語」として物語ってみたいと考える。

Ⅱ. 方法

ウサギの飼育に関わったこども・保育者・保護者の有り様について、①ウサギとの出会いを時系列に沿ってエピソード記録を収集する②そのエピソードを幼稚園教育要領の5領域からみとる③さらに、こども・保育者・保護者が味わった感情体験がどのように行動や言葉に表れているのかという点から観ていく。このエピソードは、実践者が記録したものであり、前述した②③の観点がその中に埋め込まれている。観察者が記録するエピソードとは違い実践者の主観性が高いと考えるが、その点は、一緒に実践をしてきた保育者同士それらのエピソードを読み解き検討した。

観察期間 2008年4月～2010年3月

観察場所 幼稚園

Ⅲ. 実践の経過

1. ハイと共に育つ3歳児

(1) ハイとの出会い・再会する1年生

エピソード1 家庭からつなぐ安心感 2008/04

平成20年度3歳児の担当となった私は、生後2ヶ月のハイを連れて菊組(3歳児)保育室に引越した。登園してきた子どもたちの目に入りやすく心が和むようにと保育室出入り口のテラスにケージを置き、私とハイとで子どもたちを迎える生活が始まった。入園当初はケージやトイレの掃除、水換えや固形の餌やりは登園前に私が済ませ、野菜類をこどもの手で持ちやすいよう細長く切ってケージの横のかごに入れておき、こどもと一緒にハイに野菜をやったり、食べる様子を見たりしていた。お母さんと離れて寂しくなっているリョウヤを園庭に連れてクローバーを摘んではハイにやったり、周りの子どもたちとその食べる様子と一緒に見たりする。リョウヤの表情はあまり変わらず、言葉もまだ出ないが「食べたね、おいしいねって」「お顔かいかいって」とハイの動きを見ながら言葉を添え、『ハイちゃん かわいいね』の気持ちを伝えつつこどもに安心感を培っていった。

エピソード2 そばで感じる喜び -卒園児の1年生との交流活動- 2008/06/03

ハイの出産に立ちあい親ウサギのシロ・クロと共に過ごした1年生が交流活動で幼稚園を訪れる機会があり、ミュ「ハイや〜!かわい〜!」ナツミ「なつかし〜!」と係わる。マナ「(トイレ) まだやん、やったげよか?」と聞いてくれる。私「ありがとう」と頼むと「(汚れたシート) 入れるとどここ?」「拭くものは?」「シートどこ?」と次々に準備し、てきぱきと換えていく。3歳児の子どもたちはその勢いに圧倒されてじっと見ている。掃除が終わり、1年生の人数も減ってくると3歳児も再びケージの周りへハイの様子を見にやってくる。1年生と直接話をするとはなかったが、ハイとの久しぶりの対面を喜ぶお兄さん・お姉さんの賑やかな雰囲気を3歳児も感じている様子がよくわかった。

エピソード3 届いた1年生の絵本 2008/06/04

小学校からの帰り道に、マナ「これ(きく組の子どもたちに) 読んであげて」と『うさぎのきょうだい 文:井上まな え:井上まな』と書いた絵本(資料1)を持ってくる。絵本を3歳児と一緒に見た後は、身近に置いておいた。



絵本を作ろうとした思いや、学習したばかりの書き言葉での表現に接することができる保育者としての幸せを感じずにはいられなかった。親ウサギのシロとクロと共に育ち子ウサギの誕生に立ち会い慈しんだマナだからこそこの思いであろう。

(2) 自分から手を出そうとする

エピソード4 ご飯あげていい? 2008/06

幼稚園で遊ぶことにまだ少し不安だったモトヒトは、ウサギが好きで毎日その様子を見たり、野菜をやったりしながらケージの周りでホッと落ち着いていた。好きでも怖くて触れなかったモトヒトだったが、この頃になるとケージの入り口から手を入れて撫でられるようになる。それが嬉しく大きな自信となった様子で、登園後大きな声で「ご飯あげていい?」と一直線にハイのケージへ向かう。保育者とモトヒトが餌をあげたり水を換えたりする姿を見て、他のこどもたちもやってきて同じようにするようになる。

エピソード5 僕がやりたい! 2008/06/18

ハイの水換えをしたかったモトヒトとヒトキが「僕がやりたい!」「僕がやるの!」ともめている。保育者が中に入りながら、水換えをモトヒトがし、ヒトキは餌をやることになる。リョウヘイやユイノ・ハルカ・ミウも野菜をやりながらそれぞれに食べる様子を見ている。

(3) こどもと同じように願う

エピソード6 七夕の願い 2008/07/04

保育室の前に立てた大きな笹に、こどもの願いを書いた短冊を飾っていった。こどもと同じくハイの短冊には、私が『いっぱい走って遊べますように ハイ』とハイになったつもりで願いを書き飾っておいた。保護者が登降園時にその願いを見て笑ったり「そうですね」と私の思いに共感してもらったりした。

(4) ウサギになって遊ぶ その遊びの広がり

エピソード7 ウサギになって 2008/09/16～19

雨の日が続く、保育室前のテラスに巧技台やはしごを組んで跳んだり渡ったりして遊ぶ環境を作った。よりいろいろな体を動かしたりイメージをもって楽しんだりできるようにと「ここはウサギヶ原ですよ」と声を掛けると、手で長い耳の形を作りながら、跳んだり跳んだ後も跳ねながら列に戻ったりとウサギの見た目や行動を表現する姿が見られた。そこで、運動帽子にウサギの耳をつけると、アヤノ「私はハイちゃんでな、忍者でな、プリキュアでな、ウサギやねん」と自分なりのイメージをもったり、耳を表していた手でも巧技台を蹴り、跳び下りる姿もよりウサギのようにリアルな表現になった。

エピソード8 親子ウサギになって 2008/09/20

親子運動会では、こどもが今楽しんでいることと、こどもと共に保護者の方にもハイに親しみを感じてもらいたいと願い「ウサギの親子」になって遊ぶ競技を考えた。こどもはウサギの耳の付いた運動帽子を、保護者の方は耳の付いたはちまきをそれぞれ頭に着けると、張り切って跳んだり、こどもが美味しそうにニンジンを食べる（真似をする）のをにこやかに見守ったり、ニンジンを親子で一緒に食べる仕草をしたりとウサギの親子で過ごすひとときを楽しんだ。こどもも「お父さんもニンジン食べはった〜!」「肩車で高いとこまでピョーンって跳んだ!」と普段とは違うウサギの遊びを喜び、私に伝えていた。

エピソード9 ハイの家に住む 2008/10/06

ままごとの場を“ハイの家”に見立て、ユウ・モトヒト・リョウヘイがそれぞれウサギのお母さん・お父さん・お兄さんになっておうちごっこをしている。リョウヘイ「僕お兄ちゃんやし学校行ってくる!」と出かけたり、ユウ「もうお迎え行ってくるわ」と買い物かごを手に掛けて行ったり、と言葉や仕草は人間だが、耳の付いた運動帽子をかぶっていたり、ご飯はユウ「ニンジンのスープ作ってんねん」と気持ちはウサギのようだ。

エピソード10 ハイの家を園庭に 2008/10/07

本当にハイと一緒に住んでみたらもっとウサギを身近に感じたり、こどもたちのイメージの世界が広がったりするのではと思います、ハイの家を保育室前の園庭に引っ越した。こどもと一緒に「僕が（柵と柵をつなげる）棒したげる」「これ（柵）どこにすんの？」保育者「お願い、ちょっとこの柵このまま持つといてくれる？」と長い時間をかけてやっとサークルが完成。そのことやハイに触れられることが嬉しく、サークルの中に入って撫でたり抱こうとしたりする。保育者も一緒に中に入り、「ハイちゃん、おいで」とかがんでゆっくりに抱っこしたり、「気持ちいいね」とそっと撫でたり、とハイに話しかけながら、かわり方やハイの気持ちがこどもたちの目や耳に届くよう心掛けた。

(5) 一緒にいる・仲間のハイ

エピソード11 クロからハイにもらう 2008/10/14

登園後、世話をしながら野菜がないことに気付いたヨシノ。とても心配そうな顔をしているので安心してやりたいと思い、保育者「ほら、2階にクロちゃんいはるやろ？ハイちゃんのお母さんやし、くれはるんと違う？聞きに行こうか？」と話す、ヨシノ「そうや！クロちゃんにもらいに行こう！」と安心した様子。ヨシノとその周りで世話をしていたユウ・リコ・アヤノと一緒に5歳児のテラスに行き、私「クロちゃん、ハイちゃんのお野菜ないねん、ちょっとちょうだいね」とクロの野菜をハイに分けてもらう。

エピソード12 餌（冬野菜）を育てる 2008/10/16

冬野菜を栽培する計画を立て、育てたい野菜をこどもにも聞いてみた。私「ハイちゃんも一緒に食べられるのがいいなあと思うのやけど、ハイちゃんって何の野菜が好きなんかなあ？」と尋ねると「ニンジン！」「ブロッコリー！」と今までよく餌としてやっていた野菜が挙がる。ソウイチロウ「ピーマン！」私「あれ？ピーマンって暑い夏にいっぱいできて、いっぱい食べたよねえ？」ソウイチロウ「あ、そっか、じゃあキャベツ！」私「キャベツもハイちゃん好きだよね」そして、ミニニンジンとブロッコリーを育てることにした。

エピソード13 やったげる 2008/10/27

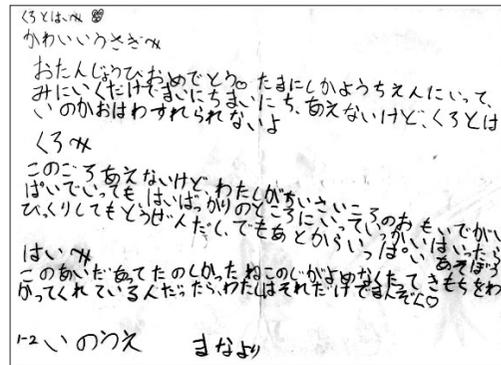
登園後、トイレのシートを換え始めると、アヤノ「アヤちゃん、やったげる」とアヤノ・ユイノがくる。野菜をやったり水を換えたりと積極的に世話をしているアヤノ。

エピソード14 追いかっこ 2008/11/06

リコ・コトネ・アズサ・ユウキと園庭のハイの家を作っていると、リナ「今日もネコ（ネコとネズミの鬼ごっこ）しよう」と保育者を誘ってくる。家が出来上がるまで、リナも一緒に手伝ってくれる。家が出来上がりハイを連れてくるが、家の扉が開いて園庭へ出て行ってしまう。それを見るとリナも楽しくなり、リナ「あっ！ハイちゃん、待て待て〜！」と追いかっこが始まる。いつもはケージやサークルの中とは違い『ほんとはハイちゃんってすごく速いしすばしっこいし、いろんなところで遊びたいって思ってるんだよ』とこどもでは敵わないウサギの力（習性）も感じてほしいと保育者「ハイちゃん、頑張れ〜！」とハイに大きな声でエールを送った。結局片付けの時間まで園庭の木の家の下の隙間に隠れてしまい、「出てきて〜」「ハイちゃん、こっちだよ！」の声にも応えず、こどもたちは残念そうに保育室に戻ってきた。自由を得たハイの勝ちだった。

エピソード15 誕生日おめでとう 2009/02/14

ハイの1歳の誕生日に小学校1年生のマナから「かわいいうさぎへ …あえないけどわたしがちいさいころのおもいでがいっぱいで…」と綴られている手紙と、ハイの兄弟のチョコちゃん（1年生のケンが家庭で飼育）からの手紙（母親の代筆）とニンジンが届く。



エピソード16 引っ越し列車 2009/03/1

菊組での最終週、年中組の部屋に行くことを伝え、保育室を整えながら引っ越しの準備をする。私「持っていていきたいものは“引っ越し列車”に乗せてください！」と空の段ボールをロープでつないで電車を作る。「(コルク)積木!」「ハイちゃんも! どうやって乗せよ?」などと話をしながらコルク積木は段ボールへ詰め込んでいく。ハイも段ボールに乗せようとするので、安全に運べるようにロープでハイのゲージと列車とつなぎ、私「よかったねえ、ハイちゃん」とこどもが自分と一緒に大きくなったハイを大切に思ってくれていることに感謝した。

2. ハイと共に育つ4歳児

(1) ハイと新入園児との出会い・一緒に進級

エピソード17 安心感 2009/04

菊組のこどもはハイと共に進級し、新しい友だちを迎えた。私も4歳児3グループ編成の一つ花梨グループの担当となった。保育室前のテラスにハイの新しい家ができ、その前の園庭にサークルの家を作る。主に進級児のヨシノ・アズサ・ハルカ・ミウ・リョウヘイが引き続き世話をしていたが、不安で私から離れられないユララ・キノと私が一緒にしていると、ヨシノたちがユララたち進級児に「ハイっていう(名前や)ねんで」と伝えている声も聞かれた。



エピソード18 高くて怖いよ〜って 2009/05



登園後の世話を終え園庭のサークルに連れて行くと、新入園児のこどもたちが珍しそうに興味をもってやってくる。たくさんの子どもがサークルに入っている時は早くハイに触れたい一心でこども同士が押し合いになってけんかが起こることもあった。また、抱き方もわからずお腹を上ひっくり返して抱える姿も多く見られた。その都度、「痛たたたた…」「高くて怖いよ〜って」などとハイの思いを伝えながら言葉と仕草で抱き方を伝えたり、実際に抱っこさせたりしてかかった。

サークル内の人数が減り雰囲気が落ち着くと、3・4人で頭をつき合わせ、「これ食べさせて」「口のどこ持っていったら食べるで」「あれ?なんで食べへんの?」とハイを囲んでこども同士で話し合っている。

エピソード19 自分で抱ける喜び 2009/06

うまく抱っこできるようになったケントにハイも安心して抱かれています。他のこどもが抱くとハイが動き、驚いて手を離してしまうが、ケントが抱くととてもおとなしくひっついていて、ケントにとっても自慢。毎朝、ケント「出していい？」と尋ねてはサークルまで連れて出す。こどもたちから「ケンちゃんに（サークルまで）連れて行ってもらおう」と頼まれるとケント「いいよ、こうしてお尻持ったらいいねん」と得意に伝える。



(2) 親ウサギの死

エピソード20 クロとお別れ 2009/06/11

5歳児が引き継いでくれていたクロが病気で亡くなった。ハイの母親である。クロとお別れがしたいこどもを連れて5歳児の保育室へ行く。泣いた顔で沈んでいる保育者の姿を見たり、きれいな花を摘んでクロの周りに飾ったり、触って「冷たい」と感じたり、私の後ろからじっとクロを見つめていたり、いつもと違う雰囲気を感じながら「死んじゃったん?」「なんで?」「目 開いてるし生きてるんちゃう?」「耳青いなあ」など思ったことを言葉にしている。そのこどもの言葉を聴きつつ私も『本当にきれいな顔してるし、息を吹き返すんじゃないか?』という思いと『いや、残念やけどそんなことはない』という思いが交錯して悲しくて悲しくて仕方がなかった。

エピソード21 僕がお兄ちゃんに 2009/09/09

教育実習生にリョウヘイ・ケインがハイのことを伝えている。リョウヘイ「ひとりぼっちやし寂しいねん」ケイン「女の子やから寂しいねん」実習生「友だちになってあげたら?」リョウヘイ「友だちいーひんし寂しいのと違う 家族がいいひんし寂しいねん、僕がハイちゃんのお兄ちゃんになってあげる」。友だちではなく家族をなくして寂しいと実習生に伝えるこどもは、親ウサギの死に出会ったことやこれまで一緒に過ごしてきたからこそハイの気持ちに寄り添う言葉で表現するのであろう。その話を実習生から聞いて私たちは、感無量だった。

(3) 小鳥当番が始まるともにかかわり始める

エピソード22 ハイの餌の調 2009/09

2学期に入りこどもの自立と共に新しく小鳥当番を始めることにする。当番のこどもたちが小鳥の野菜を家庭から持ちより世話をしていくが、野菜が多すぎて困った時は「ハイちゃんにあげたらいい!」との声上がる。最初の内は小鳥の残った分をハイにくれていたが、ハイが目に見えてよく食べることが嬉しかったり、可愛いと感じていたり、わざわざハイの分を残してから小鳥にやったり、お母さんにハイの分も別に持たせてもらったりしていった。今までは花梨グループが世話したりかかわったりすることが多かったが、小鳥当番をきっかけに他のグループや関心の薄かったこどもたちもハイに親しみをもつようになった。

エピソード23 呼びかける 2009/11 下旬

園庭がイチョウの葉で一面黄色に染まっている。そこへハイも出てきては走りまわったりイチョウの葉を食べたりしている。自分たちは食べないものだったので「ハイちゃん!あかん!あかん!」と止めるこどももいるがハイはお構いなしで食べ続けている。その食べっぷりのよさを見ながら、私「おいしいのかなあ?」とつぶやく。こども「好きなん?」私「よう食べてるねえ」と様子を見守る。

(4) こどもと同じように

エピソード24 正月を迎えるために 2009/12/09

餅つきの日、こどもは各自持ち帰る鏡餅を作る。私「ハイちゃんもいい年が迎えられますように…」と小さな鏡餅を作りつつ「あら、三方作るの忘れてたね」と気付くと、ヨシノ・ユララ・リョウヘイがかまぼこ板にマジックで絵を描いて作ってくれる。お懐紙を敷き鏡餅をのせると、ハルカが園庭から赤くなる前のオレンジ色のナンテンを見つけてきてその上にのせた。リョウヘイ「ハイちゃん、できたよ〜!」とみんなでケージの上（自分たちの鏡餅はロッカーの上に置いていたからだろうか?）に置きに行く。が、グラグラして落ちそうなので、保育室の棚に飾る。ハイができないところは自分たちがカバーしてやりながらも、自分の鏡餅ができた嬉しさを共に味わいたいという思いが、ハイも自分たちの仲間だと感じているようで嬉しかった。

エピソード25 お誕生日おめでとう 2010/02/15

登園時シールを貼りながら、日曜日がハイの2歳の誕生日で私の家でキャベツ・キュウリ・ニンジンのケーキを作ってお祝いした話や2年生になったミュウからのお祝いの手紙・チョコちゃんからの手紙（母親の代筆）とプレゼントのニンジンの話をする、いろいろなプレゼントを作り始める。こどもたちの気持ちがそわそわ、わくわくしているので、主役のハイを保育室の中にケージごと連れてきて、その横の壁面に届いた手紙を貼っておく。ユイノ「ケーキつくる紙ほしい」アズサ「私もほしい」サトミ「これ作ったしパーティに飾って」サクラ「みんな!ここに（壁面にナイロン袋をつり下げて）プレゼント入れてな!」キノノ「これ（ここに入れて、とかいた紙）、サクラちゃんの横につけて」マサキ「これ（紙のスイカ）はケーキの横に置いて」とそれぞれが誕生日を祝う気持ちでパーティの準備が始まった。白い段ボールを土台にして作ったケーキには本当に食べられるように、とレモンバームの葉がセロテープで留めて飾られている。そこにろうそくを立てていくハヤト。同じくレモンバームを水に浮かしたハーブティも添えられている。

グループのみんなで集って牛乳を飲む時に誕生パーティをする。「お誕生日おめでとう!かんぱ〜い!」とハイを囲んで飲み始める。ハイのケーキとハーブティもケージに入れてやる。「食べへんやろ〜」とみんなで見守る中、レモンバームの葉をかじるハイに「食べた〜!!」とびっくり、思わず「おめでとう!」の音がこどもから挙がる。みんなの思いがハイに届いたと感じとれる驚きと喜びの瞬間だった。翌日リョウヘイからカードが届いた。

エピソード26 感謝の表現 2010/02/16

お祝いをもらったチョコちゃんに“ありがとう”の返事を描く。自分たちのハイちゃんをお祝いしてくれて嬉しい気持ちを絵にして贈ることにする。また、2年生のミュウの手紙に刺激を受けたリョウヘイは、家に帰って「おめでとうの手紙」を書いてくる。

(5) 一緒にいる・仲間のハイ

エピソード27 一緒にの部屋で 2010/02

誕生パーティの日からテラスは寒いからと、保育室の中にケージを置いていた。距離的により身近になったので登園後、興味をもって見るこどもたちの顔ぶれも変わり、今まで世話をしていなかったカズキ「ご飯ないで」と気にしたり、ユウスケ「見て、こんなんしてる」と顔真似をしては笑ったり、ヨシノ「やっとかで」と一人でトイレを換えたりと、みんなが気にして様子をみたり世話をしようとしたりする。絵本



を読んでいるとふとハイの方を振り向き、やんちゃなダイチも「一緒に聞いているなあ」とひそひそ声で嬉しそうにするなど、生活の場を共にすることで自分たちの仲間だと思って接している機会が増えた。

エピソード28 ハイも一緒に進級 2010/03/18

1年間生活してきた保育室やおもちゃの大掃除や片付けをしているときに、私「ハイちゃんどうしようね?」と話していると、「ハイちゃんは抱っこする(抱っこして2階へ行く)やる?ほんで、これ(ケージ)は3人でよいしょ、よいしょって運んだらいいやん」と、共に一緒に大きい組になることを楽しみにしているこどもたち。

3. 私と共に留まるハイと進級した5歳児

こどもたちは5歳児クラスに進級となり、1・2年間を共に過ごしてきたハイと私は4歳児クラスに残ることになった。5歳児が2階の保育室へ向かう時にハイと出会えるように、階段の下にケージを置いた。するとやはり、登園時や私の顔を見に来た時にハイに話しかけたり、世話を気にしてくれたりする姿が多く見られた。

(1) 思いを寄せる

エピソード29 覚えてるか? 2010/04

登園後、私の顔をのぞいて「おはよう!」と声をかけてから遊びにでかけていたハルカ・ミウ・コウキらは、遊びに出かける前に、ハルカ「お〜いハイちゃん、久しぶり。ハルちゃんやで〜、覚えてるか?ちっちゃいとき一緒に遊んだやろ?」とハイに声をかけている。私「覚えてるよねえ、ハルちゃんのおうちの台所でごろーんってなっていたんだよねえ。ハルちゃん、おつきい組になったんだって」とハイに話しかけながら応える。

エピソード30 ウンコいっぱいやん 2010/04

毎日ハイの様子を見にくるヨシノ。「まだウンコいっぱいやん!ヨシノちゃん、お世話したげよか?」私「ありがとう!助かるわ〜」と任せる。4歳児が様子を見ている中、ヨシノが世話を始める。また、私と一緒に4歳児がエサや葉っぱをやっている時には、4歳児に水の替え方を教えてくれたり、まだ怖くて抱けないこどもの代わりに園庭のサークルにハイを抱っこして連れて行ってくれたり、と困っていることに気付いて力を貸してくれ、自然な異年齢のかかわりが見られる。

4. ホームステイをとおして

(1) 初めてのホームステイ3歳児の家庭へ

3歳児1学期末の懇談会で、夏休みの間も自分たちでハイの命を繋いでいきたいことを伝え、保護者にホームステイ先募集の声をかけた。保護者の協力を得て、間をあけることなく預かってもらうことになった。保護者にとっても初体験なので、世話の仕方を詳しく書いたメモを付けた。

エピソード31 心配しつつ送り出す 2008/07~08

ホームステイに出す前に「シートが〇枚で、タオルでしょう?おしっこちゃんとできるかなあ?迷惑かけへんかなあ?」と独り言を言いながら準備をしていると、保護者「わが子をお泊りに出すみたいですね」と笑われる。

エピソード32 お帰りなさい 2008/09/01

2学期始業式の日、ハイがキャリーバッグに入って登園してくると、ハルカ・ミウ・リコ・アズさは興味津津で覗きに行く。夏休み、ホームステイで預かったこどもたちはより親しみをもって、ハルカ「ハイちゃん、うちで、きれい好きやったで」とその様子も教えてくれる。

(2) 二度目のホームステイ 4歳児の家庭へ**エピソード33 ハイの夏休み 2009/07/16**

夏休みに入る前に、こどもたちにハイの夏休みについてどうするのか投げかけてみた。夏休みの間もハイへの思いがつながるように、とこどもが幼稚園に来ない間、ご飯がなくてお腹が減ったり、掃除してもらえなくていやだと思ったり、一人で寂しかったりすることをこどもたちの感情と重ねながら伝えていった。それと共に、一緒に家に連れて帰って世話したり遊んだりする方法があることも伝え、やってみたいこどもに家の人と相談してもらった。

エピソード34 ハイの冬休み 2009/12~2010/01

マサキの母が「下の子が大きくなったからもう大丈夫です！」とホームステイに協力してもらえる。そして、預かる次の方も心配だろうから、と自らノートに世話の仕方をまとめて書いてこられた。そのノートは写真付きの日記になっており、マサキ・イズミ・ハイ3兄弟の育児日記のようだった。親子でハイとの生活を楽しんでられる姿が浮かび、いい時間を過ごされたことを嬉しく思った。

エピソード35 念願のホームステイ 2010/01/25

3歳児の頃から世話をつづけてきたヨシノだが、双子の弟妹がまだ小さく、連れて帰る手段もなかったため、なかなかホームステイができなかった。が、日曜参観で父親と2人の登降園の日、代休の1日だけだったが連れて帰ることができた。日曜参観のアンケートには父親から『ハイちゃんと楽しく過ごせました。ありがとうございました』との言葉が添えられていた。

エピソード36 楽しさの連鎖 2010/02/

保育参観日の朝にホームステイ先のマサキ家から帰ってきたハイ。私「おかえり！楽しかった？」とハイに話しかけながら迎え、再会を喜んだり、マサキに家での話や心配事を聞いたり、元気に帰ってきてくれたことをマサキの家族に感謝したり、と周りのこどもたちやおとなにもホームステイの楽しさや大切さが伝わるように…と願った。

IV. 考 察

本稿では、ウサギの飼育を通してこども、保育者、保護者がともに生活を営んできたなかでの体験を、エピソードを通して「ウサギ物語」として語ってみた。

まず、そのなかでそれぞれのこどもにとって「ウサギ物語」から見えてきたものをいくつかの観点から述べてみたい。

1. ウサギとの生活のなかで

・入園や進級に伴う環境の変化の中で不安定な時期にあるこどもにとっては、世話をする保育者の介助のもとで、ウサギのからだの温もりや柔らかさに触れることやしぐさを見つめることが、心を開放し安心感を得ていく経験になった。

・「ケンちゃんに（サークルまで）連れて行ってもらおう」と頼まれるとケント「いいよ、こうしてお尻持ったらいいねん」と得意に伝える。入園当初は不安定で保育者のそばにいてハイの世話をずっと見ていたケントが、ハイを抱くことができることで、みんなから頼まれ自信を得ていくことが分かる。そのケントの姿を身近に、自分もしてみようと挑戦する心がこどもからこどもへと広がる様子も分かる。

・「友だちがいなくて寂しそうね」と、おとなから問われて「違う 家族がないから寂しいねん 僕お兄ちゃんになったげる」と応えている。ハイを巡って日々起こっている出来事を、自分の身に置き換えて語るまでに、こどもは心情的な感覚を身につけている。

・3年生になったマナやミュの『まいにちあえないけれど クロとハイのかおはわすれられない』との手紙や、『ハイや～ かわいい』と呼びかける姿や、小学生の手紙に刺激を受けて4歳児のリョウヘイが、ハイが誕生日を迎えたことと自分の年を重ねて、誕生日の喜びを手紙に綴るなどの表現を生んでいる。それは、こどもの心情的な豊かな感性の表現である。

2. 遊びにおける二重性のなかで

・ウサギの世話をしているときには、ウサギはこどもにとって客体であるが、自分がウサギになって遊んでいるときは主体であり、そこに、あたかもウサギの身になる感覚を体験する。そのことは、他者に対する心の理解にもつながっていく経験になると考える。

・2009年度研究からは、5歳児になると「ウサギになったときの自分は、いたずらや甘えと自由に感情を表出」しており「自分に戻ると、その感情は抑制され5歳児としての振る舞い方をする。その二重性を行き来することが逆に、うまく自己を振り返りコントロールする力を身につけるように思う」ことが実証されたが、3歳児においては、ウサギになって遊ぶことを楽しんでおりウサギと自分を一体化させている。4歳児になると、少しウサギを対象化してみるようになり、微細な感情発達と共に5歳児の様相に近づく兆しが見てとれる。

3. 共にいる保育者の語り

・ウサギに心があるように保育者が『おいしいねって』『お顔かいかいって』と話しかけている。保育者は言葉を話さないウサギの思いを代弁するような関わりをすることが多くみられる。それは、人もウサギも同じ動物であり生きていることを伝え、幼稚園教育要領に掲げている「…親しみや畏敬の念、生命を大切にすること、公共心、探求心などが養われるように」との願いがあるからである。その語りがかこどものウサギへの関わりに影響を与えていく。つまり、ウサギに寄り添う経験は、同時に他者に寄り添う気持ちを育む経験ともなるのである。

・保育者が育て親として『いっぱい走って遊べますように ハイ』と七夕飾りに書いたり、ホームステイに出す前に「シートが○枚で、タオルでしょう？おしっこちゃんとできるかなあ？迷惑かけへんかなあ？」と言いながら準備をしている姿を通して、保護者から「わが子をお泊りに出すみたいですね」と笑われるまでに「育てる営み」の共感を保護者とも育んでいるといえる。

前研究と同様に、ウサギの飼育をめぐる物語は、こどもの育ちに重要な意味があることが分かる。本稿では、そのストーリーは『1. ハイとの出会い 2. かかわりはじめる 3. “こども

と同じように『4. 一緒にいる・仲間のハイ』といった展開をもつ。ハイとの出会い、自分たちと一緒に育つハイ、ハイをめぐるいろいろな人の関わりを見聞きすること、親ウサギの死を垣間見るといった、命のつながりをめぐる出来事（ストーリー）に遭遇していく。そのなかで、こどもは、親しみ、愛着、驚き、慈しみ、喜び、心配、不安、悲しみといった様々な感情のうねりや情緒的な体験を豊かにしている様子が、エピソードからうかがい知ることができる。このような情緒的な体験は、「心情・意欲・態度」を育む幼児教育にとって大切になることはいまでもない。また、幼児期の情緒的な体験こそが、実は他方で「なぜ?」「どうして?」「どのように?」「どうすれば」という問いや工夫を引き出すことになる。それは科学する心を培い小学校教育へ接続していく基盤となる。

卒園して就学した子どもとの交流活動の中で、彼らが見せる心情、意欲、態度が、話し言葉から書き言葉で表現されるようになる。主体的に生き生きと語られる表現は、幼児期に生き物と触れ合い共に生活をした感情体験があるからこそであろう。継続して飼育してきたことの経験が連続して学習へと高まっていく様子が分かる。

V. おわりに

継続する飼育のいのちは、人と人とのネットワークも育んでいる。2010年5月に日本獣医師会の皆さんの協力を得て新たに子ウサギの仲間を迎えた。そのニュースを知って、2008年度卒園生（現在小学3年生）が、幼稚園に訪れたときのエピソードを追記したい。

可愛すぎて帰れへん 2010/05/13

ノノ「ウサギ見に来た」と一人で園にやってくる。子ウサギを見るとノノ「可愛い～」と赤ちゃんを見たときのような笑顔が出る。ノノ「抱っこしていい?」私「いいよ、まだ赤ちゃんやし座ってね」ノノ「わかった」とケージの中に恐々手を入れる。ケージの中で子ウサギが動くと、ノノも驚いて手を引っ込める。あんなにウサギと一緒に過ごしてきたノノがなかなか抱っこできないので、相手が小さすぎて躊躇しているのかと思いきや、ノノ「久しぶりやし、抱き方忘れた」とのこと、私「そうか、もうずっと抱っこしていないもんなあ、ほらほら、お腹とお腹を合わせて…」といいながら子ウサギをノノのひざに乗せる。一度抱くと思出したようにノノ「可愛い～」と片手で撫でながら抱っこする。ずっと抱っこしていたノノに、私「もうそろそろ帰る時間やなあ」と声をかけると、ノノ「あかん、可愛すぎて帰れへん」となかなか子ウサギから離れられない。私「また今度おいで」ノノ「いいの?」私「いいよ、」と約束をして帰る。

悲しかったから… 2010/05/24

ノノとナツミが学校の帰りにやってくる。ノノ「今どこにいるの?」と尋ねてくる。「パンタ（8ヶ月）は私の家、ハイは5歳児のマサキくんの家で、ウメとサクラ（2ヶ月）はまだ小さいから幼稚園にいるよ。マサキくんの家からは大雨やからもう一日預かってくれるって電話があってね…」ナツミ「いつも連れてくんの大変やなあ」ノノ「でもお母さんいはるしなあ」ナツミ「でも（休園で幼稚園が）1日ないし、長いこと（一緒に）いれていいなあ」とホームステイの大変さと楽しさの両方を感じている。

しばらく話した後、私「じゃあね」と送った時ふいにナツミが振り返り、ナツミ「ほら、今日、私らちょっと目、赤く腫れてへん?」と言う。ノノはナツミに「そのこと言うの」と驚いたように目配せを送っている。ナツミ「あんな、今日、教育実習の先生とお別れやって、悲しくて泣いてしまってたか。そやし気分転換

にウサギ見よかな、と思って」と。言い終わるとナツミとノノ「じゃ」と手を振って帰っていく。私「またね」と見送る。

ウサギの飼育の保育を最初に経験した子どもが就学後も、ウサギのニュースを聞きつけて心配したり、期待したり、喜んだりと様々な感情のうねりと共に幼稚園にやってくる。幼児期にウサギと親密だった子どもが、世話を保育者に代わって手際良くしたり、誕生を祝いカードやプレゼントをくれたり、幼稚園の子どもに絵本を作ってくれたりする。その子どもたちが、ウサギと保育者との情緒的な深いつながりを今も育んでいる。

参考文献

岩田純一（2001）「<わたし>の発達」ミネルヴァ書房

岡本夏木（2005）「幼児期」岩波新書

中川美穂子（2007）「〈相手の感情と身体〉を理解する脳をつくる」文部科学時報 pp.51-55

中川美穂子（2007）「小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 4:53-65

文部科学省（2008）「幼稚園教育要領」

無藤隆（2009）「幼児教育の原則」ミネルヴァ書房

鍋島恵美, 高野史朗, 光村智香子（2010）「ウサギと共に暮らす日々のできごとから学ぶーウサギの飼育の保育を通してー」京都教育大学環境教育研究年報第 18 号 pp.1-24

追記

本稿は、全国学校飼育動物研究会会誌「動物飼育と教育」に投稿した原稿をもとにして加筆修正を加えてまとめなおした。

資料 『うさぎのきょうだい』（小学生になったマナの作品 幼稚園時代に遊んだ魔女も登場している）



表紙



6 おわり



1 「ある森にうさぎの兄弟がいました。兄の名前はうぎで、妹の名前はうやでした。うぎとうやは、いつも仲良しでした」



2 「ある日うぎとうやは、森の奥に遊びに行きました。帰りにたくさん木に囲まれ家に帰れなくなってしまいました。」



3 「しばらく歩くと、目の前にお菓子がいっぱいありました。飴、クッキー、キャンデー、チョコいろいろなお菓子です。うぎとうやはもりもり食べ始めました。ずっと食べていたら寝てしまいました。」



4 「寝ている間に、魔女が来て覗んでいました。それをうぎがみつけてじっくり見ると箒が長かったため、うぎはいいこと考えて、『あの魔女は優しそうだし、なんていったら帰ってくれるだろう』（箒に乗せてもらう）」



5 「そして、無事うぎとうやは家に帰ることができました。」

6 おわり

(自由に使っていいですけど、破らないでください)